中禅寺

中禅寺は日光でも最古のお寺の一つで、勝道上人が784年に建立した寺です。修行用の道場として創建された輪王寺の支院である中禅寺は、今日では本尊として祀られ、いわゆる「立木観音」でよく知られています。立木観音は高さ6メートルの木像で、千の手を持つ慈悲の菩薩・千手観音を(形にしたもの)。勝道上人が1200年以上前に彫ったとされる立木観音は、日光に現存する最古の仏像です。これは重要文化財に指定されています。

中禅寺は、創建された当時、現在の二荒山神社中宮祠のある男体山登拝口にあり、男体山巡礼の起点としての役割を果たしていたといいます。しかしながら明治時代（西暦1868-1912)に、大山津波(土砂崩れ)が男体山で発生。立木観音を安置する中禅寺は、中禅寺湖にまで流されてしまったのです。奇跡的に、歴史ある立木観音はこの災害から逃れました。中禅寺湖の水面に浮かびあがると、そこから何百メートルも離れた湖畔に漂着。「立木観音がこの場所を選んだ」と当時考えられたので、流された現在の場所に中禅寺は再建されたといいます。

仁王門

中禅寺までの参道は、“仁王門”と呼ばれる巨大な赤色の門に守護されています。深紅に染まる2体の守護神・仁王が中に鎮座しているため、こう名づけられました。その猛々しい顔つきと強い肉体が、悪霊の侵入を断念させると言われています。これと同様の門は、日本中の寺と神社で見受けられます。

走り大黒天堂

“走り大黒天堂”は、中禅寺観音堂への参道の突き当たりにあります。これは、勝道上人が男体山の山頂に登ることを助けた霊にちなんで名づけられました。伝説によると、勝道上人は当初2回、男体山の登頂に失敗したと言われています。3回目の登頂の前に、勝道上人は中禅寺湖の岸で信念深く祈祷を行いました。すると、勝道上人の前に仏教の神「大黒天」が現れ、湖水の上を走って来るではありませんか。その後勝道上人は、この大黒天の助けで登頂を果たすことができまし。そのためこの“走り大黒天堂”には、大黒天が祀られています。

本堂

本堂は立木観音を安置する場所です。勝道上人は、中禅寺湖の上に金色の観音の姿を目撃した後、この巨大な仏像を彫ったとされています。観音を見た勝道上人は直感を得て、巨大な桂の木を見つけて、生きた木をそのまま一体の観音像に彫り上げました。このためこの仏像は、”立木(standing tree)”と呼ばれています。十一面千手観音の複数の顏は、捧げられる祈祷の種類によって異なる顔を向けることを、千本の手は、人類を救済するために様々な能力を持っていることを表現しています。

五大堂

五大堂は本堂の上にある丘の中腹に建立されました。五大堂には、仏教の教えを守護する5体の智の仏が祀られています。本尊は、刀で世俗的な欲望を切り落とし、修行僧を守護する不動明王です。その他の4体はそれぞれ、4方角の1つずつを守護しています。五大堂の天井には著名な画家・堅山南風作の壮大な龍の絵画が施されています。堅山南風は東照宮薬師堂に描かれた龍を修復した人物としても知られています。五大堂は、中禅寺湖と周囲の山の華麗な眺めを堪能できることでも著名です。